女性のための情報誌

NETWORK

NO. 13

目　次

特集　しなやかにはばたいて……2
◇翼をひろげる女性たち……4
◇個性が性を超えて……6
ウーマンスクランブル……8
しずおか女性会議ー県政への女性の参加 …10
グループ紹介……12
国際交流のひろば……13
ねっとわあく　らいぶらりい……14
ポプリ……15
編集員紹介、編集後記……16

静岡県

しなやかに　はばたいて

女性が一人の人間として生き、多くの障害があり、現在社会で活躍する女性たちも、それぞれに悩みます。私たちは、そうした彼女たちの汗と涙を未来に生かすことしなやかにはばたくのか、と考えるのです。

・・・特別寄稿・・・

てんぷらは揚げないで

増田れい子

三岐鉄道という私鉄がある。さんぎ、というのだが、三重県の員弁（いなべ）川にほぼ沿って、鈴鹿山脈を目ざして走っている小さな鉄道である。名古屋方面への通勤客を運ぶほか、沿線の学校に通う学生たちを乗せ、休日には観光客も増える。延長二七・六キロ、単線運転で、はた目にはいかにものんびり、牧歌的な電車に見える。

駅は無人駅ふたつを入れてぜんぶで十六ある。そのうち、六つの駅に女性駅長さんがいる。全員主婦駅長さんで、長いひとはもう二十二年の上も、勤め続けている。短いひとでも、かれこれ八年になって、揃って、無事故を誇っている。（詳細については「暮しの手帖」一九八八年十三号に書かせていただいた。）

六人は六人とも、やればやるほど仕事が面白い、この仕事は女性に好適とたのもしい口調であった。朝は午前六時半から夜は九時までの十五時間勤務で休日は週一回。駅が住宅をも兼ねていて、職住一致。だから女駅長さんのいる駅にはせんたくものがひるがえっていて、すぐわかる。

六人のなかで一番若い伊藤朝子さんが、駅長さんになったとき、長女三歳、二女一歳だった。いまは三女もいる。職歴八年。子育てと駅長職はぴったり重なっている。一番長い梅山徳江さんも、赤ん坊を育てながら駅の業務を完ペキにこなした。この二人だけではない、全員が、こどもが小さいうちから駅長さんになっている。

電車の発着時のあいまには、家事育児何をしてもいいという取り決めで、ごはんを炊きながら切符を売り、電車を送った直後に洗濯機のスイッチを入れる。電車のダイヤをアタマの中にしっかり入れて、家事育児をプログラミングする。

伊藤さんが三女を出産したときは、夫の母と父が交替勤務についた。義父はもと三岐鉄道職員で、駅の仕事は勝手知ったるナントヤラで大張り切りだった。

ところで、駅長さんの給料は？駅の乗降客の多寡によって差は出るが、ざっと月十万円。一年ごとに契約を更新する委託駅長さんなのだ。もともと、クルマに乗客をとられて経営難におちいった地方私鉄の生きのび策、人件費合理化の目玉として、主婦駅長さんを誕生させた。家のなかにいるだけではゼロ、家事育児を両立出来る駅長仕事ならやってみようと、三岐鉄道の場合、会社の意図と主婦の側の事情が、かなりの程度一致して〝GO〟となったわけだ。

◆　◆

いま、仕事を持つ女性が戦後最高に増えた。雇用されて働く女性の数はパート労働も含めて千六百万人をこえ、専業主婦の数よりも四十二万人多くなっている。その七割近くが、既婚者だ。これを、女性の社会進出……という言葉でいいあらわすのだが、進出というと何かはなばなしく、花火がドンとあがるふんいきを連想させる。しかし、現実は、家事育児に加えての就労であって、進出の実態は、過重労働の様相を濃くともなっている。

フルタイムで専門職あるいは管理職につく人も出てきて〝進出〟のタイトルがふさわしく思える場合もあるが、こうした〝進出〟組に共通しているのは、多かれ少なかれ家事育児労働の切りはなしに何とか成功した人々である。（ディンクスの選択も含めて）〝進出〟している女性の家事育児の片棒を担っているのは肉親近親のうちの女性でありまた社会福祉の手（多くは女性）である。〝進出〟した女性は、結局、公的な福祉分野で働く女性の手と、さまざまな理由で社会への進出をしないでいる女たち、多くは主婦の私的な手をかりて、その進出を支えている。働く女性を支えているのは、いまのところやはり女性なのである。

六人の駅長さんの中の一人がこういった。

「この仕事についてから、私はてんぷらだけは揚げないことにしました。いえ、揚げられなくなりました。揚げはじめたとき電車が入ってきたらあぶないですから」

女性が社会に進出すると、必然的にその家庭内の家事育児のなかみの再編成、調整がはじまり、なかには切り捨てられるものも生じる。てんぷらはやめ、ということになる。しかし、どうしても切り捨てられない分野がある。こどもの食事、スキンシップ、健康管理、しつけ、相談相手、看護や介護。

男性の手の支えも不可欠である。しかし、ある超一流企業で働く管理職女性数十人にアンケートしてみたら、三分の一は独身、残りが共働きだったが夫の家事育児参加はほとんどなかった。その夫たちのほとんどは連日外食、連日深夜帰宅であった。

男性の働き方が変わらなければ、働く女性の苦痛は去らないとつくづく思った。

高令化も進む。老いてから人間らしく生きるには老いる前に豊かさを獲得しておかなければならない。そのためにも労働のチャンスが欲しい。人間らしい生を全うするために家事育児労働を含めた人間男女の生き方の再編成に向かうときが来ている。私たちの社会の課題である。

※増田れい子さんは、十一月十八日に静岡市民文化会館で行われる「北陸・東海・近畿地区婦人問題推進地域会議」のパネルディスカッションに、講師兼司会者として出席されます。

増田れい子さん

１９２９年東京生まれ
１９５３年東京大学文学部卒
１９５３年４月、毎日新聞社入社
社会部、サンデー毎日、学芸部編集委員など歴任。現在、「女のしんぶん」編集長兼論説委員。昭和５９年度日本記者クラブ賞受賞。エッセイスト。

＃著書リスト＃
「独りの珈琲」、「夢のゆくえ」、「風の行方」「いろんな瓶」、「ゆりかごの歌」、（以上、鎌倉書房）　「白い時間」（講談社）、「春の予感」（冬樹社）など。

＃趣　味＃
古い布、古い焼き物を集める、花を育てる、犬と遊ぶ。

翼をひろげる女性たち

女性が生き方を自由に選択できる社会、その中でバラエティーに富んだ生き方ができる――そんな社会環境が理想です。そうした状況に今、確かに変わろうとしている一方で、昔ながらの女性に対する社会的価値観が変わっていない現実もあります。

ここに御紹介する三人は自分に合った生き方で社会に接点を見い出した人たちです。

都市銀行 課長代理

山田緋紗子さん

店内唯一の女性総合職として、ロビー部門の指揮をとる山田さん。

―お仕事をなさってどのくらいになりますか。

三十二年になります。あっという間に過ぎてしまった感じがします。入行当時のことを考えれば、社会も銀行業務もずいぶんと様変わりし、その変化に驚いています。

―お忙しい毎日でしょうね。

税制改正や事務手続きが激しく変わるので、どうしても自宅で勉強をせざるをえない状況になります。幸い、家事や育児を母に任せることができた環境と、主人を含めて、家人の理解と協力があったので勤めることができたのだと思います。

―大学生と高校生の娘さんがいらっしゃるそうですが。

娘たちが小さい頃は、私が勤めることを喜んでいたとはいえませんが、今ではその娘たちもお母さんのように結婚をしても勤めたいと言っています。

仕事をすることである程度の自己啓発ができますが、無理をして勤めるとどこかにうまくいかないところが出てくるような気がします。家の中をまとめなければ職場もまとめることができないと思います。また働き続けていくには、自分を甘やかさないで、仕事に対するきびしい姿勢としっかりとした職業観を身につけることが必要でしょう。いまはどの企業も少数精鋭で、いかに高能率の経営をしていくかを考えているのですから、それだけ果たすべき役割・任務は大きいと思います。

「周囲の皆さんのおかげで今日まで無事に勤められたのです。」と語る山田さんの肩ひじ張らず、しなやかに、そして生き生きと働いている姿が印象的でした。

地方情報誌「HAINANタウンイン」を編集発行する

池田ちか子さん

「HAINAN・タウンイン」太陽と海の香りいっぱいのタウン誌が発行された。その編集代表が池田ちか子さん。随所に榛南地域への愛着が光る雑誌には、地元出身の池田さんをはじめ、多くの若者の熱い思いが感じられる。

「地域の活性化のためになどという大義名分があって始めたわけではないんです。この本がきっかけとなって町が少しでも息づいてくれれば、と思うんです」。

池田さんや若者たちに気負いはないが、地域のさまざまな情報の発信基地として、町の中に新風を吹き込んだ事は確かなようである。

「若い頃は、都会での暮らしばかりに目が向いていたんです。それが、子供を持って、東京で育てる事にちょっと違和感を持ち始めた頃でしたか、ふるさとの自然の良さが、それこそワーッと目に飛び込んで来たんです」。

静大卒業後、東京の出版社に就職。現在、夫の居る東京と榛原とで半々の生活を送っている。

「子育てって、やってみると文句なしに楽しいんですね。こんな楽しい事を人に任せるなんてもったいないな、と思い始めたら仕事も惜しくはなくなって」。

現在は、タウン誌編集のかたわら、選択肢を広げ、国際協力事業団のコーディネーターも務める。

「榛原での生活は、子供と一緒に自然と触れ合え、ほんとうに感性を満足させてくれるんです。でも、どこか仕事に対して、私なりの後ろめたさみたいな部分があって。私がここでできる仕事はと考えたら、編集しかなかったんですね。とりあえず三号まで頑張りたいです」。

子供を産んだ事で生き方への妙なこだわりがなくなったと言う池田さん。生き方を、仕事を、自分と家族の呼吸に合わせ、柔軟に変えてゆこうとする彼女に、自然体に生きるのびやかさと確かな自信を感じた。

「こぐまの会」代表

中原とくさん

十五年ほど前、地域の民生委員活動が、一家庭の主婦中原さんの運命を大きく変えた。

それまで中原さんは、ご主人に「子供が小さい内は家を空けるな」と言われ、守り通していた。それが障害者の様子を調べる内、ダウン症児をかかえる母親から「集団教育を受ける機会が欲しい」という声を聞き、寺で五組程の母子と一緒に遊ぶ場を設けることとなった。ご主人の転勤で一時東京に移ったが、そこで全国的組織の「こやぎの会」に入り勉強会を通してリズムセラピィやリトミックなどの治療法を学んだ。その間も月に一度は静岡に戻り、医師の力を借りて母と子の集団教育を続けていた。「障害を持っていても子供は子供」という医師の考えに共鳴した中原さんは障害児の人間としての発達を目指すようになった。

「障害児も生まれてくるのが自然なんです。それをまず母親が理解し、理解してくれる人が周囲にたくさんいることが大切」。と中原さんは、障害児と母親が気軽に集まり共に学べる場所をとの配慮から、静岡市の中心部に「おもちゃ図書館」を開設した。現在は、障害児を持つ母親同士のサークル「こぐまの会」の代表としてこの図書館を運営しながら、様々な活動を行っている。

中原さんの場合、ご主人の「家を空けるな」の一言を守り通したわけだが、障害児との関わりの中で、幼児期に母親の存在がどれ程重要かを人一倍肌で感じることができ、中原さん自身も母親が安易な気持ちで外に出、子育てをおろそかにすることには批判的だ。そのご主人も現在は「するなら続けろ」と陰に陽に協力して下さるそうだ。「やりたいことをとことんやる」のが中原さんの活力の源になっている。ボランティア活動以外にも山登りが大好きで、寸暇を惜しんではご主人と南アルプスなどを縦走されるとか……いつまでも若さを保つ秘訣のようだ。